

小野派一刀流の成立過程とその伝承

— 古文献による研究 —

立木幸敏（代表）*、朴 周鳳*、魚住孝至**、大保木輝雄***、吉田鞆男[†]、
仙土克博[‡]、長南信之[‡]、宮本光輝[‡]

* 国際武道大学、** 放送大学、*** 埼玉大学名誉教授、

[†] 研究所客員研究員・古流剣術研究会、[‡] 古流剣術研究会

2016・17年度のプロジェクト研究の概要

剣術は江戸中期までは流派の形（勢法・組太刀）を中心に稽古されていたが、18世紀後期から防具を着け竹刀で打ち合う撃剣が急速に広がり、それが基盤となって近代剣道が成立した。今日の武道が、近世武術に基づいて近代的に再編成されたものであるとするならば、武道の文化的淵源を探るには、近世武術の中心であった剣術から剣道への上記の展開過程を研究することが重要と考えている。これまでの多くの剣術関係の研究では、大まかな歴史叙述の他は、流派の主要な古伝書を翻刻と流派の宗家の伝承術技の紹介だけで、古伝書の解釈に基づく剣術の実技の様子は十分に研究されていない。本プロジェクトは、先行研究にて新陰流剣術を中心に確立した古伝書に基づく形の解明する手法を踏まえて、まず一刀流剣術で17世紀に行われていた形（組太刀）の実際を当時の古文献に即して研究をする。

著者らの先行研究では小野家五代目・忠方の「一刀流割目録（以下割目録）」の注釈にて、「真之五点」の「真剣」には七種の遣い方が記述されており、内三本は「きりおとし」の記述から「切落」の原型が見られ、さらにその他の四本もあわせ「切落」直後の打太刀の動きに七通りのバリエーションがあり、それ毎に顛末を示していると報告した。小野家での一刀流は刀法の「切落」が核となり「切落」の刀法および「五点」のバリエーションの多くが表五十本の基礎になっていると考えられる。

また、「割目録」には「本目録」を註解する形で、「真之五点」「草之五点」「新真之五点」が記され、それ以外にも組太刀として「十二点」「九太刀」が記されているが、その組太刀からも表五十本の組み入れられた太刀があると著者らは考えている。

本研究では小野家伝書の「十二点」と津軽家文献「剣術組遣方覚書」にある「表五十本」を用いて、先行研究で確立された、伝書から推定復元する手法を用いて復元、比較検討することにより、「十二点」と「表五十本」の関係性の検証を行った。

結果、津軽家文献「剣術組遣方覚書」にある「巻返し」一～三本目と小野家伝書「割目録」記された「十二点」、第一、二は相同といえる。よって「十二点」の一部は「表五十本」の構成要素となっている。

著者らの先行研究を加味すると以下の事が考えられる。小野派一刀流は、「当流第一の所（四代・忠一）」とした刀法である「切落」は一刀斎由来と考えられる「真之五点」の真剣及び、一刀斎と初代・忠明の頃に稽古されていた「三重」に如実に表れている。

また、その刀法「切落」のバリエーションならびに「五点（真之五点）」のバリエーション（「草之五点」）で、はじめの二十五本が成立し、二代・忠常の頃に「新真之五点」「草之五点」に加え、「十二点」「九太刀」などからも太刀を取り込みながら二十五本が足され計五十本の組太刀が構成されたと考えられる。

さらに、三代・忠於で「折身」、忠一・忠方で別の「草之五点」と代々の工夫を行いつつ、同時期に津軽信政、信寿への伝授の過程で組太刀の整理が行われ完成された。その後「新真之五点」、「草之五点」、「十二点」、「九太刀」は次第に稽古されなくなり、忘れ去られていったことが窺える。

【Key words】 Ono-ha Ittoryu（小野派一刀流）、Kiriotoshi（切落）、Goten（五点）、shinken（真剣）、Jyuni-ten（十二点）、Makikaeshi（巻返し）

柔道における競技情報の即時配信システム構築に関する研究【最終報告】

研究代表者：廣瀬恒平（国際武道大学）

共同研究者：森実由樹（国際武道大学）、石井兼輔（国際武道大学）、
越野忠則（国際武道大学）、前川直也（国際武道大学）、
大島修次（国際武道大学）

本プロジェクトにおいては柔道における競技情報の集計方法および電算化を検討するとともに、競技情報の即時的配信環境を構築することを目的とした。パソコン上において情報の入力および表示が可能な段階まで「スポーツコード」を柔道用にカスタマイズすることに成功したが、実際のテレビ画面に情報を映し出しそれを放送する実用段階までシステムを構築できなかった。その要因としては、頻繁に行われるルールや解釈の変更に対応させるソフトのカスタマイズが間に合わなかったこと、加えて現在ある技名称では分類しきれなくなりつつある中で瞬時に技を識別する能力を備えた人材の育成が困難だったことが挙げられる。この2点およびテレビ局との技術的な連携作業の推進が課題として残った。

【キーワード】 柔道、競技情報、即時配信システム

階級別からみた大学柔道選手の競技力と レジリエンス能力との関係について

笠原政志、山本利春、石塚正一、石井兼輔、越野忠則、
矢崎利加、前川直也、大島修次、清水伸子
(国際武道大学体育学部)
柏崎克彦

要旨

本研究は大学柔道選手を階級別に分けて競技力とレジリエンスの関係性について調査することを目的とした。対象は質問紙調査結果の記入漏れを除く大学柔道選手440名(20.0±1.3歳、競技歴12.6±3.0年、男子360名、女子80名)とし、大学個人戦競技成績は世界大会優勝から大会出場機会なしまで幅広い対象者であった。調査項目は個人属性、スポーツ選手のレジリエンス能力(以下SRA)とした。結果はSRAを構成する競技的身体能力と競技的意欲・挑戦において重量級よりも軽量級が有意に高い結果となった。また、軽量級は全国大会ベスト4以上に該当する者の方が有意に競技的自己理解度と競技的意欲・挑戦が高い結果となった。以上により、軽量級は重量級に比べて身体的にきつい状況に適応し、且つ前向きにチャレンジする気持ちが強く、さらに全国大会や世界大会にて良好な成績を納めるためには、自己理解力と様々なことにチャレンジする気持ちが必要であることが示唆された。

キーワード：レジリエンス、柔道、階級別

発育がラット内側腓腹筋の表層部および深層部の形態的・機能的特性に及ぼす影響（中間報告第二報）

刈谷文彦（研究代表者）、立木幸敏、小林啓三

和文要約

本プロジェクトの第2報にあたる本研究では、発育期（5週齢）ラットと若年期（17週齢）ラットの腓腹筋赤色部（深層部）および白色部（表層部）における筋タンパク質合成に関与する主要なタンパク質の発現量とリン酸化をウエスタンブロット法にて同定し、それぞれの発育段階における同一筋内における筋線維タイプ組成の異なる部位での筋タンパク質合成調節の差異を検討した。その結果、5週齢ラットにおいては、筋タンパク質合成シグナル伝達系（PI3K-Akt系）に関与するp70S6Kの発現量が、腓腹筋白色部で赤色部に比べ、有意な高値を示した（ $P<0.05$ ）。一方、筋細胞成長抑制に関与するmyostatinの発現量と筋タンパク質合成シグナル伝達抑制に関与するAMPK α のリン酸化は、赤色部が白色部に比べ有意な高値を示した（ $P<0.05$ ）。18週齢ラットにおいては、5週齢で認められた腓腹筋両部位間のp70S6K発現量の有意な差は消失したが、myostatin発現量およびAMPK α のリン酸化の有意な差は維持された（ $P<0.05$ ）。加えて、18週齢ラット腓腹筋では、筋タンパク質合成の翻訳過程に関与するrpS6のリン酸化が白色部に比べ赤色部で有意に高値であった（ $P<0.05$ ）。これらの結果から、発育過程の段階によって、ラット腓腹筋赤色部と白色部での筋タンパク質合成の程度に違いが生じることが示唆された。

【キーワード】 筋タンパク質合成、シグナル伝達、PI3K-Akt系、筋線維発育抑制

スポーツ選手の体力測定評価システムの構築～第2報～

研究代表者：森実由樹（国際武道大学）

共同研究者：山本利春（国際武道大学）、井上哲朗（国際武道大学）

笠原政志（国際武道大学）、清水伸子（国際武道大学）

和文要旨

本プロジェクト研究は、研究所 B102 を体力測定室として有効活用し、体力測定評価システムを構築することである。システムを構築するには、体力測定項目の選定、B102の環境整備、過去の体力測定データの整理および体力測定システムに関わる人材の育成が必要である。

2016年度は、これらに関連した過去の体力測定データの匿名化作業、体力測定に関する測定機器の使用説明会を開催した。開催した説明会には63名の学生が参加した。参加者の多くはクラブ活動での体力測定や卒業論文作成のために参加しているものが多かった。

2017年度は、体力測定に使用する機器の修理・購入など測定機器の整備を行なった。また、研究所地下に位置する B102を体力測定室として使用できるようレイアウトを作成し、不要備品の廃棄や移管についての検討を行った。体力測定マニュアルの作成に関しては、測定項目を一覧表として作成し、目的にあった測定項目を選定できるように準備を進めている。

最終年度となる2018年度には、成果物として体力測定ガイドラインの作成および体力測定室として研究所 B102の環境整備を行い、体力測定を担う人材育成方針の策定をもって体力測定システムの完成としたい。

【キーワード】 体力測定、測定評価、トレーナー教育

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

「地域における健康・体力づくりの企画と実践・成果」

～半年間の集団運動型身体活動による目標達成率～

【プロジェクトの分類】 スポーツ振興

【研究期間】 2015年4月～2018年3月

【プロジェクト代表者氏名（所属部局・職名）】 小西由里子（体育学科 教授）

【共同研究者・（所属）】 井上哲朗、森実由樹、立木幸敏、刈谷文彦（国際武道大学）、
谷口有子（京都学園大学）、見波静（よしだ福祉会）、
長濱秀紀（勝浦スポーツクラブ）

【キーワード】 中高年、健康・体力、企画、実践、成果

【和文要旨】

本プロジェクトの目的は、本学と近隣自治体の共同事業として2002年から継続している、定期的・継続的な集団運動型身体活動である、勝浦市「健康ハツラツ教室」、いすみ市（旧岬町）健康体力づくり事業の「運動教室」、2001年から実施している御宿町「健康・体力チェック」の企画や成果について、形態・体力・行動変容・QOLなどの観点からまとめ、近隣地域住民に対して今後さらに充実した協力・支援を行うための基礎資料を得るとともに、本学学生に実践的学びの機会を提供し、フィットネストレーナー志向の学生および武道健康福祉・スポーツトレーナー・健康科学コース等の学生に対する教育に還元していくことである。

今年度の試みとして、勝浦市「健康ハツラツ教室」参加者28名に、半年後の体力の達成目標を設定させ、その達成状況を検討した。その結果、運動教室参加率70%以上の継続者15名のうち、目標達成者は6名（40%）であった。

学内スポーツ医科学サポートを通じた学生トレーナー教育

～スポーツ現場における緊急時対応計画に着目して：第2報～

山本利春、清水伸子、笠原政志、森実由樹（国際武道大学）

要旨

本研究では、体育系大学における救急体制と救急・救命教育に着目し、学内スポーツ医科学サポート活動を通じた学生トレーナー教育の構築を目的として、今年度は、学内クラブ活動における緊急時対応計画（以下EAP）立案チェックシートの作成および各クラブにおけるEAPの立案とマニュアル作成の取り組みを行った。これらの取り組みを実施することで、学内クラブの救急体制の調査における学生トレーナーの現状把握やスポーツ現場での緊急時対応の強化をより高めること、また、従来取り組んでいる学生トレーナー教育に加えて、より充実した教育内容の検討が必要となることが課題と考えられた。今後は、学内クラブごとのEAPの立案とマニュアルを完成させ、各クラブ活動現場への掲示や教育ツールとしての救急法に関する教材作成に取り組んでいくことが課題として挙げられた。

【キーワード】 学内医科学サポート、救急体制、救急・救命教育

大学サッカーチームの競技力向上と傷害予防を目的とした コンディショニングサポート

西園聡史、笠原政志、西山侑汰、森実由樹、山本利春（国際武道大学）、大内 洋

要旨

本研究はスポーツ医科学的視点を取り入れたコンディショニングサポートを実施し、B大学サッカーチームの競技力向上とコンディション不良予防の基礎資料を得ることを目的とした。対象は千葉県サッカーリーグ1部に所属するB大学サッカー部Aチームとした。コンディショニングサポートにおける主な取り組みは、2015年から2016年度における課題と考えられた内容の解決策を具体的に捉えるために競技力向上とコンディション不良に関わる内容に関するモニタリングを実施した。その結果、競技力向上に関する点では、スプリント能力と間欠的持久力不足が確認できた。コンディション不良に関する点では、こむら返り対策に繋がる調査をもとに予防策をプログラムし、コンディショニングをした結果、2016年度から大幅にこむら返りを起こした選手が減少した。そして、2017年度シーズンでは目標として掲げていた千葉県大学サッカーリーグ1部優勝を成し遂げることができた。

水球競技におけるリアルタイム・スコア記録集計方法の 開発とその活用

土居陽治郎（国際武道大学）、榎本 至（鎌倉女子大学）、南 尚隆（鳴門教育大学）

要旨

スポーツのデータ化は競技者やチームの強化のみならず、観戦者や視聴者層の拡大、さらにはスポーツの熱心なファン（支援者）拡大などの多様なニーズによって、急拡大してきている。特にゲーム性の強い球技スポーツにおいては、試合という場面での情報収集とその活用が積極的である。球技スポーツの一つである水球競技にもそうした変化があり、競技進行上不可欠なタイマー計器とプレー分析をセット化した国際水泳連盟公認オメガ社製品が登場すると、試合を通じたデータ配信環境が一変してきている。

しかしながら我が国においては公益財団法人日本水泳連盟の方針から、オメガ社製機器類を使用しないことから、水球競技におけるデータ化はほとんど展開されず、そうした環境からも国際競技力強化に課題があるのが現状である。そこで、本研究ではオメガ社が保有しているプレー分析に関わる権利に抵触しない方法を開発し、実際の競技会運営で国際水準なみのプレー分析およびデータ配信できるような環境づくりを提案することを目的とした。

オメガ社製機器の関係から昨今のIT化とは逆行する形を余儀なくされるが、水球プレーを専用に開発したプレー記録用紙に手書きで記録し、試合中のピリオド間でPC入力することで、試合後30分以内で国際水準なみのスコア・プレー記録集計結果を配信できるようになった。その方法で、複数の全国大会での競技運営に従事し、競技運営の一環としての水球スコア・プレー記録集計業務の確立化を検討した。競技役員としての資質が担保できれば水球プレー記録業務は可能であるが、その後のPC機器での集計および分析作業は、プログラム化を施して工夫を加えても、特に記録段階での人為的ミスの発見や修正といった作業を同時に行う必要があるため、ある程度、水球スコア・プレー記録集計業務全体への理解と訓練が必要であることが明らかとなった。また、大会時の競技役員配置には予算面で限界があるため、少人数で多くの試合の記録集計業務をカバーする必要があるため、この業務担当者の業務量が多大となり、それが原因でミスが多くなるなどの課題点が浮かび上がった。

本研究で開発したものは、特別高価な機器類を必要としないため、手軽でどこでも実践でき、その結果は国際水泳連盟水準でのデータ化に至るという有用性を提示できたが、実際の国内水球競技での競技会運営で標準化するには、組織的な取り組みが不可欠であることも明らかとなった。

スリランカにおける学校保健導入に向けた フィージビリティスタディ

中西 純

要旨

本研究は「アジアアフリカ学術基盤形成事業：アジア学校保健安全・環境教育研究開発ネットワークの構築と持続的な若手研究者の育成」を学校保健に特化し、スリランカで展開可能かどうかの可能性を探ることを主な目的とした。研究期間が1年であるため学校保健に関する情報収集に努めた。

訪問1回目：共同研究者のディネス氏が経営する空手道場（白水修養会スリランカ支部）にて身長・体重測定のワークショップを開催し生徒らの測定を行った。

訪問2回目：JICAスリランカオフィスを訪問し、スリランカの学校、教育、学校保健、政治等の情報を得た。保健省ファミリープランニングビューローを訪問し、アイシャ課長からスリランカの学校保健政策の情報を得た。教育省健康栄養課を訪問し、レヌカ課長からスリランカの学校保健政策について情報を得た。

【キーワード】 学校保健、児童生徒、発育発達